

高等学校「世界史」の「主題を設定し追究する」学習(2)

— 「世界史の扉」の場合 —

森 才三

通史的な系統学習を補完するものとされてきた「世界史」主題学習は、99年の学習指導要領の改訂により、学習計画の全体の中で導入部と終結部に位置づけられ、それぞれの位置づけに応じた目標と内容が示された。本稿では、そのうちの「世界史B」の導入部、すなわち「世界史の扉」の教材を開発し、それを教授書の形で提示する。開発した教材は、学習指導要領にも示されているように、「世界史と日本史のつながり」に気づかせ、歴史に対する関心と世界史学習への意欲の喚起をめざすものであるが、さらにもう一つ、世界史学習の事始めとして、「歴史とは何か」について考えさせ、「解釈としての歴史」に気づかせ、〈歴史への真摯さ〉に眼を開かせるきっかけとしたい。

I 問題の所在

1999年(平成11年)改訂の学習指導要領(以下、指導要領ないし〇〇年版と略記する)は、高等学校「世界史」学習の二つの柱であった主題学習と文化圏学習を改変し、高等学校の「世界史」は大きくその様子を変えることとなった。筆者は、前稿¹⁾で、60年版から89年版までの指導要領における「世界史」主題学習を整理し、99年版における「世界史」の主題学習の意味を検討し、その含意を明らかにした。本稿では、前稿で確認した99年版「世界史」主題学習の趣旨をふまえながら、「『多元主義』の歴史授業²⁾」の観点も取り入れ、「世界史B」の導入部、すなわち「世界史の扉」における主題学習の教材開発を行い、それを教授書の形式で提示する。

II 「世界史の扉」の教材開発の視点

「世界史の扉」は、「世界史B」の実質的な内容に入る前の動機づけの単元として、99年の指導要領の改訂において初めて登場したものである。この単元の教材開発具体化するには、どうしたらよいのだろうか。その手がかりを、指導要領のなかを探してみたい。この単元の〈目標〉〈内容〉〈方法〉について、指導要領が述べていることをあらためてまとめると、次のようになる。

| | |
|------|---|
| 〈目標〉 | 歴史に対する関心と世界史学習への意欲を高める。 |
| 〈内容〉 | 三つの主題の事例を提示し、それぞれについて「追究させ、気付かせる」事柄や課題を提示 |
| 〈方法〉 | 生徒の主体的な追究(『解説』) |

「世界史の扉」では、「歴史に対する関心と世界史学習への意欲を高める」ことがねらいとされ、「世界史における時間と空間」「日常生活に見る世界史」「世界史と日本史とのつながり」の三つが具体的な主題の事例として示さ

れている。そして、それぞれの主題について、取り上げるべき具体的な事例、追究させるべき内容、気付かせるべき事柄が示されている。本教材研究では、その主題の事例のうち、「世界史と日本史とのつながり」を取り上げ、『学習指導要領解説』に例示されている「東シナ海・南シナ海を舞台にした琉球の交易」と「オホーツク海や樺太を媒介とした北海道と北東ユーラシアのつながり」に着目して教材開発をおこなう。教材化に際し取り上げる事例、追究させる内容、気付かせる事柄は、具体的には次の通りである。

| | |
|-----------|--|
| 〈取り上げる事例〉 | 琉球国王の皮弁服、アイヌの首長の山丹服 |
| 〈追究させる内容〉 | 近世日本列島における南の琉球の交易と北のアイヌ・山丹交易の具体的様相 |
| 〈気付かせる事柄〉 | 日本列島の南と北における世界とのつながり 日本列島の南と北との結びつき |

以上は、指導要領に即した「世界史の扉」の教材開発(パートI)であるが、これに加えて、世界史学習の事始めとして、次のような教材開発(パートII)も試みたい。すなわち、「『歴史とは何か』について考えさせ、『解釈としての歴史』に気づかせる」ことをねらいとする教材の開発である。「世界史の扉」は、「世界史」という歴史科目の学習の事始めである。その歴史学習の事始めにあたり、「歴史に対する関心と世界史学習への意欲を高める」だけではなく、「歴史とは何か」ということを考察させることも意味あることである。私たち現場の歴史教師は、歴史について何の断りもなく、古い順に、あたかもそれが真実であるかのように歴史授業を進めてはいないだろうか。歴史は解釈であり、〈歴史の真実〉などあり

えないことは、E. H. カーの「歴史とは、現在と過去とのつきぬことを知らぬ対話である」という至言が示す通りである。しかし、そうした授業を受けた生徒たちは、自分たちが学習している歴史は「解釈としての歴史」であることに気がつかない。「解釈としての歴史」を学習内容とせざるを得ない歴史教育は、それをいかに克服できるのだろうか。池野範男の「社会形成力を育成する社会科」、児玉康弘の「解釈批判学習」、寺尾健夫の「社会的構成主義に基づく米国の中級歴史カリキュラムの授業分析」など様々な試み⁹⁾がなされている。しかし、池野や児玉の研究は、刮目すべき理論づくり研究であるが、「いざ、それを実際に日々の授業で」ということになると、その道は遠い。また、寺尾の理論の分析的研究では、分析し定式化された理論に基づく授業試案はまだ提示されていない。目下のところ、甚だ繕いではあるが、現場で実際になされている日々の授業に最も即したやり方は、歴史授業の授業開きにおいて、メタ・ヒストリー学習を組み込み、「歴史とは何か」考えさせるというやり方¹⁰⁾ではないだろうか。そこで、本教材研究では、指導要領に準拠したパートⅠに続いて、それを前提としたメタ・ヒストリー学習のパートⅡを設定する。パートⅡでは、パートⅠの内容（近世日本列島の南と北における世界とのつながりの諸事実）を事例として、「鎖国」という歴史用語の使い方¹¹⁾の可否を追究させることによって『歴史とは何か』について考えさせ、「鎖国」という歴史用語が解釈である（「解釈としての歴史」「歴史の多元性」ということに気づかせ、〈歴史への真摯さ〉¹²⁾に眼を開かせるきっかけとしたい。

以上、本教材開発では、導入単元「世界史の扉」に対して、指導要領に準拠したパートⅠと、筆者が『多元主義』歴史授業の立場から独自に加えたパートⅡを設定する。これをまとめると、次のようになる。

| |
|---|
| パートⅠ：近世における日本列島と世界とのつながり 〈目標〉歴史に対する関心と世界史学習への意欲を高める。 パートⅡ：「鎖国」という歴史解釈の再検討 〈目標〉「歴史とは何か」について考えさせ、「解釈としての歴史」に気づかせる。 |
|---|

Ⅲ. 「日本列島の歴史と世界史のつながり」 の内容構成

「世界史の扉」の扱いに基づいて開発した授業試案を、教授書の形式で提示する。試案は、前節で述べたように、パートⅠ（第1時間目と2時間目）、パートⅡ（第3時間目）から成っている。

近年の日本近世史研究においては、従来の西欧中心史観的な「鎖国」の捉え方が再検討¹³⁾され、所謂「四つの口」に注目して、東アジアとの関係の視点から「鎖国」を捉え直そうという作業が進んでいる。パートⅠでは、

そうした研究の蓄積の中から、高良倉吉の「薩摩口」や菊地勇夫の「松前口」、さらに佐々木史郎の「山丹交易」の実態的研究に拠りながら、教材開発¹⁴⁾をおこなう。また、パートⅡについては、従来の「鎖国」の捉え方を再検討した研究成果はもちろんのこと、それに基づいた先進的な日本史の授業実践研究も踏まえる。そうした授業実践の先行研究として、土屋武志と佐脇義敏の研究¹⁵⁾が眼につく。いずれも、歴史教育における「鎖国」の扱いを整理し、その教材化における問題点をまとめ、新しい「鎖国」概念に基づいて、土屋は中学校、佐脇は高等学校の教材開発を行っている。パートⅡでは、そうした「鎖国」理解の鍛え直しに基づいた先行実践研究を、メタ・ヒストリー学習の視点から捉え直して参考にする。

具体的な教材構成は、パートⅠでは、授業の冒頭でまず、冊封により琉球国王に下賜された「皮弁服」とアイヌの首長たちが山丹交易によって手に入れた「山丹服」を提示し、生徒の興味・関心を引きつける。「皮弁服」と「山丹服」を選んだのは、「日本列島の南の王と北の首長の服は、なぜ似ているのか」という問いを導くためである。「気付かせる」ことをめざす「世界史の扉」の授業は、基本的には、それらの交易が「どのようであったか」を問う形で展開することになる。つまり、主題学習の授業構成として、事実記述的授業構成¹⁶⁾をとるわけである。しかし、そうした授業の展開はややもすると単調になり、何より次々に出てくる断片的で瑣末な事実に、生徒たちは「うんざり」ということになりかねない。「世界史の扉」が開かれる前に、生徒たちの歴史に対する関心と世界史学習への意欲は閉ざされてしまう。そこで本試案では、「どのように」という問いを「なぜ」という問いに置き換える操作として、「皮弁服」と「山丹服」を提示したわけである。そして、その問いを軸にして、その答えを追究するという形でパートⅠの前半の授業（第1時間目）を展開し、近世日本列島における南の琉球の交易の様相を解明していく。そして、琉球の進貢貿易の輸出品である昆布や俵物を着目し、「なぜ、南の琉球は北の物産である昆布や俵物を輸出品とすることができたのか」という問いを次いで、パートⅠの後半の授業（第2時間目）を展開し、北の山丹・アイヌ交易の様相と日本列島の南と北のむすびつきを解明していくのである。さらに、パートⅡは、パートⅠで確認した近世における日本列島と世界とのつながりを材料に、「そうしたつながりがあるにもかかわらず、なぜ『鎖国』という言葉が使われるのか」という問いをたて、それを追究していくことによって「歴史とは何か」について考察させ、「解釈としての歴史」を確認させるのである。このように、パートⅡでは、近世における日本列島と世界とのつながりに関する

事実を探究させることにより、「歴史は解釈である」という考え方を、すなわち概念的知識の習得をめざす概念探求的授業構成⁸⁾をとる。

IV. 小単元「日本列島の歴史と世界史とのつながり」授業試案

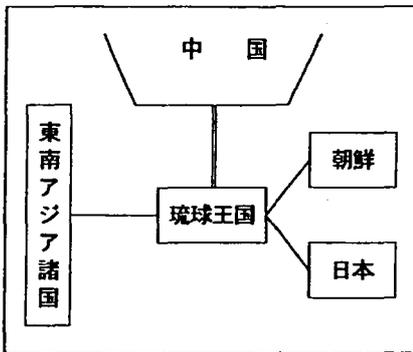
1. 小単元の目標

- ① 日本列島の北と南における交易の様相の解明し、日本列島の歴史と世界史のつながりに気づき、世界史への興味・関心を高める。
- ② 近世日本の通商・交易の実態から、「鎖国」という歴史の解釈性に気づき、歴史は絶えず再審されることを理解する。

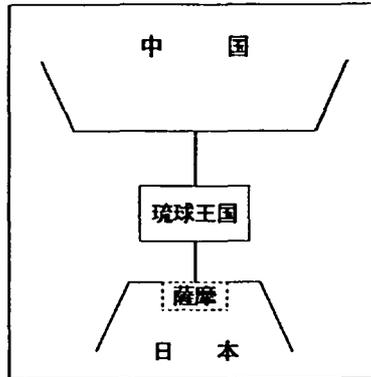
2. モデル図と学習内容

モデル図

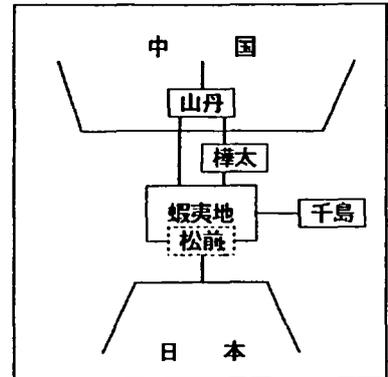
【モデル図A】琉球の大交易時代



【モデル図B】両属体制下の琉球の交易



【モデル図C】蝦夷地の北方交易



□ 学習内容

- (1) 琉球王国は明朝・清朝と冊封関係を結び、明朝・清朝との間に進貢貿易が行われた。
 - a. 琉球王国の進貢貿易は明朝によって優遇され、琉球王国は東アジアの中継貿易の要として繁栄した。
 - b. 日中両属体制下の進貢貿易は、薩摩藩に依存して維持され、明朝から清朝へと続いた。
- (2) 蝦夷地の北方交易は、清朝の毛皮貢納制度と江戸幕府の蝦夷地政策によって生み出された。
 - a. 山丹人が清朝への毛皮の貢納によって手に入れた山丹服や蝦夷錦は、蝦夷地のアイヌが集めた毛皮と、直接あるいは樺太アイヌを介して交換され、松前藩によって金持ちや寺社・武家の間に流通した。
 - b. 蝦夷地の鮭・鱈は北前船によって流通し、畿内や瀬戸内地方に商業的農業を発達させ、東日本の食生活を変えた。
 - c. 蝦夷地の昆布や俵物は、長崎における対中国貿易の金・銀や銅に替わる輸出品となったのみならず、琉球の進貢貿易においても輸出品となった。
- (3) 近世日本の通商・交易の実態は、「鎖国」という言葉のイメージからほど遠いものであり、「鎖国」は西欧中心史観に立つ歴史の解釈である。解釈としての歴史は、事実の実証的研究の積み重ねによってその客観性が再審される。

3. 単元の展開（3時間）

【第1時間目】

| | 発問 | 教授・学習過程 | 資料 | 生徒から引き出したい知識 |
|----|--|---|----|---|
| 導入 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 次の二つの衣装を比べてみよう。どんなことに気づきますか。 ○ 二つの衣装は、どのような人が着たものなのか ● 日本列島の南と北の琉球国王とアイヌの首長の衣装は、なぜ似ているのだろうか。 ○ 日本列島の南と北で、どんな交流があったのだろうか。 ○ それぞれの衣装について具体的に調べ、日本列島の南と北における交流を解明して | <p>T:資料を提示し、発問。 P:答える。</p> <p>T:説明する。</p> <p>T:発問し、考えさせる。 P:考え、仮説を立てる。</p> <p>P:学習課題を提示する。 P:学習課題を確認する。 T:学習の手順を確認する。</p> | ① | <ul style="list-style-type: none"> ○ 袖の形は少し違うが、龍文の刺繍など、二つの衣装は似ているところがある。 ○ 一つ(A)は琉球王国の国王、もう一つ(B)はアイヌの首長たちが着ていたものである。 ○ おそらく日本列島の南と北で何らかの交流があったのではないだろうか。 |

| | | | |
|-------------|--|---|--|
| | いこう。 | | |
| 展 開 1 | <p>○ 琉球王国の国王は、(A)の衣装をどうして手にて手に入れたのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ どういう事情で、中国の皇帝からもらったのだろうか。 ・ このことから、(A)の衣装についてどんなことがいえるだろうか。 <p>○ なぜ、このような関係を結ぶことになったのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 冊封関係にはどんな意味があるのだろうか。 ・ 琉球国王は、なぜその呼びかけに応えたのだろうか。琉球王国にとって、どんな意味があったのだ | <p>T:発問し、考えさせる。 P:考える。 T:説明する。 T:説明する。 P:確認する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。 T:確認する。</p> <p>T:説明する。 P:確認する。 T:資料を提示し、説明。 P:確認する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:説明する。</p> | <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 琉球で作らせたのか、他所から手に入れたのか。 ○ 中国の皇帝からもらった。 ○ (A)の衣装は、琉球王国が明朝と冊封関係を結んだ際に、冊封使を通じて、明朝の皇帝から琉球国王へ、王権のシンボルとして皮弁冠や大統曆とともに与えられた皮弁服である。国王は重要な儀式で着用した。 ○ (A)の衣装は、琉球王国と明朝との冊封関係を象徴するものである。 ○ 琉球王国のこうした関係は、15世紀初めから明・清との間に19世紀後半まで続いた。 ○ 明朝は、建国後、伝統的な中国を中心とする国際秩序の回復をめざし、近隣諸国へ入貢をよびかけ、琉球へも入貢を促す使者がやって来た。 ○ 礼や法を体現する文化地域が中華であり、それ以外の地域は文化を知らない四夷とする華夷観念、徳を備えた中国の天子の威徳が周辺に及ぶとする王化思想のあらわれであった。 ○ 中国皇帝の権威を背景に琉球王国を支配することができ、中国の文化にも触れ合うことができる。 ○ それらのみならず、進貢使を通して行われる進貢貿易による経済的利益も保障される。 |
| 展 開 2 | <p>○ 進貢貿易とは、どのような貿易だろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 進貢貿易は、大きな経済的利益をあげることができたのだろうか。 <p>○ 琉球王国の進貢貿易は、どうだっただろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 琉球王国の貢期や入港地はどうだったのだろうか。 ・ 琉球王国からの進貢品はどんなものだったのだ ・ 進貢品から、どんなことに気づくか。 ・ 琉球王国産の品で、意外なものはないか。 | <p>T:説明する。 P:確認する。</p> <p>T:発問し、考えさせる。 P:考える。 T:説明する。</p> <p>T:学習課題を提示する。 T:資料を提示し、発問。 P:答える。 T:説明する。</p> <p>T:説明する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:発問する。 P:考える。 T:資料を提示し、説明。 P:確認する。</p> | <p>③</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 明朝に派遣される朝貢のための各国の進貢使は、その一部が都(北京)まで行き、残りは入港地に残って指定された商人と貿易をしていた。 ○ ……。 ○ 進貢貿易は、貢期や入港地の指定など、制約が多かったが、海禁政策を行っている明朝との正式な貿易は、進貢貿易によるしかなかった。 ○ 琉球王国の入貢回数は、他の国を圧倒している。 ○ 琉球王国の貢期は「二年一貢」で、入港地は海外貿易の経験豊富な「福州」(初め泉州)が指定され、他の国より優遇され、どの国よりも大量の中国産品を手に入れていた。 ○ 馬、螺殻(ヤコ貝)、海巴(カサ貝)、成熟夏布、硫黄、磨刀石/刀、扇/瑪瑙、象牙、木香、丁香、蘇木、胡椒などである。 ○ 琉球王国の特産品のみならず、日本や東南アジアの物産もある。 ○ 馬・硫黄。 ○ 琉球王国が優遇された理由は、琉球王国がもたらす馬・硫黄にある。建国間もない明は、北のモンゴルに備えなければならず、 |
| 展 開 3 | <p>○ なぜ、琉球王国は日本や東南アジアの物産を手に入れることができたのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 小さな島国である琉球王国に、大量の中国物産の需要があるだろうか。 ・ これらのことを考え合わせると、どういうことがいえるだろうか。 | <p>T:発問し、考えさせる。 P:考える。 T:発問し、考えさせる。 P:考える。 T:再び、発問する。 P:答える。</p> <p>T:資料を提示し、確認。</p> | <p>⑤⑥</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ ……。 ○ ない。 ○ 琉球王国は、手に入れた中国商品で近隣諸国と貿易し、日本や東南アジアの産品を得ていたのではないか。 ○ 15世紀中頃の琉球王国の王が自国を「万国の津梁」ととらえているように、琉球王国は中国との太いパイプをもとに国営で中継貿易を行い、東シナ海・南シナ海の要となり繁栄した。 |

| | | | |
|-----------------|---|--|--|
| <p>展開 4</p> | <p>○ 琉球王国の中国への進貢貿易とそれによる中継貿易の繁栄は、いつまで続いたのだろうか。</p> <p>○ 薩摩の支配下での中国への進貢とは、どういうことだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 薩摩の支配下に入るとは、どういうことだろうか。 ・ 薩摩藩が琉球王国を支配しているのに、中国の王朝への朝貢が可能だろうか。 <p>○ 薩摩の支配下での進貢貿易は、以前と変わらなかったのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 進貢品に変化はなかっただろうか。 ・ 進貢品はどのように変化したのだろうか。 | <p>T:説明する。 P:確認する。</p> <p>T:発問し、考えさせる。 P:考える。 T:資料を提示し、説明。 P:確認する。</p> <p>T:資料を提示し、説明。 P:確認する。 T:説明する。</p> <p>T:考えさせる。 P:考える。 T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:資料を提示し、説明。 P:確認する。</p> | <p>○ 中継貿易の繁栄は、16世紀の海禁政策の緩みやポルトガル・スペインのアジア進出によって終わったが、中国への進貢貿易は、17世紀初めからの薩摩の支配下にあっても、明清交替期の混乱を経て、清代も続いた。</p> <p>○ 矛盾している。</p> <p>○ 琉球を侵攻した薩摩藩は家康より琉球王国の支配を任せられ、琉球王国は薩摩藩の先導で幕府に謝恩使・慶賀使を送って服属の意を表すことになった。</p> <p>○ 薩摩藩は、中国に対して、琉球支配の隠蔽工作を行っていた。</p> <p>○ 秀吉の朝鮮侵略以来途絶えた対明貿易を、琉球王国の進貢貿易によって復活しようという期待があった。</p> <p>○ ……</p> <p>○ すでに中継貿易は衰退していたのだから、進貢品の内容が変化したのではないか。</p> <p>○ 昆布や俵物(干ナマコ・干アワビ・フカヒレ)が、中国への輸出品の中心となった。</p> |
| <p>終結</p> | <p>○ これまで学習したことから、琉球王国の大交易時代の繁栄を築いた中継貿易をモデル図にまとめてみよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 琉球王国の国王の「皮弁服」には、どんな意味があるといえるか。 ○ 日中両属時代の琉球王国の進貢貿易をモデル図にしてみよう。 | <p>T:図にまとめさせる。 P:モデル図にまとめる。</p> <p>T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:図にまとめさせる。 P:モデル図にまとめる。</p> <p>T:説明する。</p> | <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> <p>モデル図A</p> </div> <p>○ 「皮弁服」は冊封関係の象徴であり、冊封関係に基づく進貢貿易によって、琉球王国は東シナ海・南シナ海における中継貿易の要として繁栄していた。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> <p>モデル図B</p> </div> <p>○ 日中間の重層的な国際関係の中で進貢貿易は続けられていた。</p> |

【2時間目】

| | | | |
|-----------------|---|---|---|
| <p>導入</p> | <p>○ 琉球王国の進貢貿易の新しい輸出品となった昆布や俵物は琉球で採れるのだろうか。</p> <p>● なぜ、北の物産である昆布や俵物を手に入れることができたのだろうか。</p> | <p>T:発問する。 P:考える。</p> <p>T:資料を提示し、説明。</p> <p>T:学習課題を提起する。 P:学習課題を確認する。</p> | <p>○ 琉球王国は亜熱帯であり、昆布や俵物は琉球の産物ではないのではないかと。</p> <p>○ 昆布や俵物は琉球王国の産物ではない。特に、昆布は北海道・三陸海岸が産地である。</p> |
| <p>展開 1</p> | <p>○ 昆布や俵物はどういう経路で琉球王国へ運ばれたのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 昆布や俵物は、自由に売買されたのだろうか。 ・ なぜ長崎の会所に集荷されることになっていたのだろうか。 ・ 薩摩藩は密貿易をやっていたのだろうか。 | <p>T:説明する。 P:確認する。</p> <p>T:説明する。 P:確認する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:説明する。</p> <p>T:説明する。 P:確認する。</p> | <p>○ 蝦夷地・松前から北前船がもたらした昆布や俵物を、薩摩商人が大坂や下関で買い入れて、琉球王国の進貢貿易の輸出品とした。</p> <p>○ 昆布は自由に売買されたが、俵物は幕府の統制管理下に置かれ、長崎会所を通さない売買は密貿易とされた。</p> <p>○ 長崎での対中国貿易では、初め金銀が、次には銅が輸出されていたが、これらの不足から銅代替輸出品として俵物が重要となった、このため貿易が行われる長崎に集荷されることになった。</p> <p>○ 長崎貿易と琉球の進貢貿易は競合関係にあったといえる。</p> <p>○ 薩摩藩の密貿易は、何度も幕府で問題となった。</p> |

| | | | |
|-----------------|---|---|--|
| <p>展開 2</p> | <p>○ 松前・蝦夷地では、昆布や俵物はどのように集荷されていたのだろうか。</p> <p>・ どのような人々が、アイヌとの交易していたのだろうか。</p> <p>・ 松前藩はどのようにアイヌと交易をしたのだろうか。次の絵は何をしているところだろうか。</p> <p>・ もう一枚は何をしている所を描いたものだろうか</p> <p>・ これらのことから、アイヌ交易についてどんなことが言えるだろうか。</p> | <p>T:発問する。 P:答える。 T:資料を提示し、発問。 P:答える。</p> <p>T:説明する。</p> <p>T:資料を提示し、発問。 P:答える。 T:説明する。 P:確認する。</p> <p>T:資料を提示し、説明。 P:確認する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。</p> | <p>⑪</p> <p>○ アイヌとの交易によって、集荷された。</p> <p>○ 幕府から松前志摩守へ対アイヌ交易の管理が保障されている。</p> <p>○ 松前藩のアイヌ交易は家康の黒印状によって認められて以来、代々の将軍から同様の朱印状が出されていた。</p> <p>⑫</p> <p>○ 幾人かのアイヌが武士に挨拶をしている。</p> <p>⑬</p> <p>○ 初めアイヌ交易は、アイヌが松前にやって来て、この絵のようにアイヌの首長たちの松前藩主への謁見し、その後松前城下で交易をしている。</p> <p>○ 松前藩で商場知行制が行われるようになると、商場の周辺のアイヌの首長は商場の役人のもとに集められ、絵のような儀式を行い、その後交易が行われた。</p> <p>○ アイヌ交易は、幕府からそれを許された松前藩を通して、一種の朝貢・服属の形式で行われた。</p> |
| <p>展開 3</p> | <p>○ アイヌはどんなものをもたらしただろうか。昆布や俵物だけだろうか。</p> <p>・ 樺太アイヌや千島アイヌから手に入れた物は、どんなものだろうか。</p> <p>・ 鮭や鯨にはどんな需要があったのだろうか。</p> <p>・ 樺太アイヌや千島アイヌがもたらした物産の需要はどうだろうか。</p> <p>・ アイヌ交易でもたらされた品々を分類して確認してみよう。</p> <p>○ 山丹服、蝦夷錦とはどんなものだろうか。</p> <p>・ このことから、(A)(B)の衣装について、どんなことがいえるだろうか。</p> | <p>T:発問する。 P:答える。 T:説明する。</p> <p>T:説明する。 P:確認する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。 T:説明する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。 T:説明する。 P:確認する。</p> <p>T:分類さ、確認させる。 P:分類する。</p> <p>T:資料を提示し、説明。 P:確認する。</p> <p>T:説明する。 P:確認する。</p> | <p>○ やはり海産品が多いのではないか。</p> <p>○ 鮭や鯨、煎海鼠・干鮑などの俵物、昆布などの海産品以外に、樺太アイヌや千島アイヌとの交易で手に入れた物もあった。</p> <p>○ 樺太アイヌからは絹織物(蝦夷錦)、山丹服、綿織物、段通、ガラス玉(青玉)、鷲や鷹の尾羽…など。千島アイヌからはラッコ皮や鷲・鷹の尾羽…など。</p> <p>○ 日本国内で、肥料や食用としての一般的な需要があった。</p> <p>○ 畿内・瀬戸内の商業的な農業や東日本の食生活と結びついてその需要を高め、商場知行制から場所請負制になると、商人たちにより交易の拡大ではなく漁業生産の拡大がはかれた。</p> <p>○ ……</p> <p>○ 山丹服や蝦夷錦は江戸時代中後期の人々の自尊心をくすぐる格好の小道具として武士や寺社、金持ちたちに喜ばれた。ラッコ皮や鷲・鷹の尾羽は大名間の贈答品として武家社会の需要があった。</p> <p>○ 長崎や琉球での交易の輸出用のもの、肥料や食用としての一般流通用のもの、限られた人々へ流通する奢侈的の品々、の3つに分類される。</p> <p>○ (B)の衣装は山丹服とよばれる絹製の中国の官服で、アイヌの首長たちの間では正装・ハレ着として通用していた。また、蝦夷錦は絹製の反物である。</p> <p>○ 二つの衣装はともに中国の官服で、日本列島の南と北は昆布や俵物によってつながっていた。</p> |
| <p>展開 4</p> | <p>○ アイヌの人々が、なぜ絹製の中国の官服や反物を持っていたのだろうか。</p> <p>・ アイヌの人々はどのようなルートで手に入れたのだろうか。</p> <p>・ なぜ、松前藩は直接交易をしないのだろうか。</p> | <p>T:発問する。 P:考える。 T:説明する。 P:確認する。</p> <p>T:説明する。 P:確認する。</p> <p>T:説明する。 P:確認する。</p> | <p>○ ……</p> <p>○ アムール中下流域に住む山丹人と直接に、あるいはサハリンに住むアイヌの人々を通して取引し手に入れた。山丹服とよぶのはそのためである。</p> <p>○ アイヌが集めた山丹の品々は、宗谷(後に、樺太南端の白主)の商場に松前藩主の交易船が来航し、買い上げ流通していった。</p> <p>○ 山丹人は清に服属する外国人であり、直接取引すると密貿易の嫌疑をかけられるから、アイヌを通す必要があった。</p> |

| | | | |
|----|---|--|--|
| | <ul style="list-style-type: none"> 狩猟民である山丹人が、なぜそのようなものを持っていたのだろうか。 毛皮の朝貢で、官服や反物が手に入るだろうか。 なぜ、清朝は山丹人を毛皮貢納民としたのだろうか。 毛皮を求めたのは清朝だけだっただろうか。山丹交易は順調にいったのだろうか。 <p>○ 山丹人は、なぜアイヌと交易をしたのだろうか。</p> | <p>T:説明する。 P:確認する。</p> <p>T:説明する。 P:確認する。</p> <p>T:説明する。 P:確認する。</p> <p>T:発問する。 P:考える。 T:説明する。</p> <p>T:発問し、考えさせる。 P:考える。</p> <p>T:確認する。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○ 中国では華夷思想に基づく周辺民族政策として収貢頒賞を行っていたが、アムール川流域の狩猟民も、この地の特産品である毛皮(特に、黒貂)を朝貢していた。 ○ 毛皮(クロテン)資源に注目した清朝は、住民を毛皮貢納民として組織し、貢納民の集落や氏族の首長は清の官僚組織に位置づけられ、毎年絹製の官服や絹織物の反物などが下賜された。こうして山丹人は中国の官服である山丹服や反物を手に入れた。 ○ 清朝は毛皮交易に経済的基盤を持っていた女真から興隆した王朝で、毛皮交易の重要性を認識していたし、当時中国では、風俗の奢侈化や厳冬の耳の防寒用具として毛皮の需要の高まり、黒貂が最高級品として人気があった。 ○ ロシアは毛皮を求めてシベリアを東進して来たが、1689年のネルチンスク条約によって清朝のアムール統治は確立し、交易も栄えた。 ○ アイヌがもたらすものの中に、山丹人が必要とするものがあつたのではないか。 ○ 山丹人は清朝に貢納する毛皮を確保する必要があり、アイヌとの交易では、そのための毛皮や山丹人自身の生活用品として鉄製品が喜ばれた。山丹服や蝦夷錦を求めるアイヌと思惑が一致した。 |
| 終結 | <p>○ アイヌの人々が(B)の衣装を手に入れた経路をまとめてみよう。</p> <p>・ モデル図をもとに、(B)の衣装の意義について考えてみよう。</p> | <p>T:指示し、モデル図にまとめさせる。 P:まとめる。 T:説明する。</p> <p>T:考えさせる。 P:考える。 T:説明する。</p> | <div style="border: 1px solid black; width: 100px; margin: 0 auto; padding: 5px; text-align: center;">モデル図C</div> <ul style="list-style-type: none"> ○ アイヌの人々は、山丹人が清への毛皮朝貢によって得た中国の官服や反物を、山丹人との交易によって手に入れた。 ○ (B)の衣装の背景には、山丹人の清朝への朝貢、山丹人とアイヌとの交易、アイヌとの松前藩による交易がある。 ○ アイヌの活動の範囲は広く、ユーラシア北東部に及んでいる。 山丹貿易・アイヌ交易は、清朝の毛皮貢納制度と江戸幕府の蝦夷地政策が作り出し栄えたものであるといえる。 |
| | <p>○ (A)と(B)の衣装は、なぜ似ているのだろうか。</p> <p>・ (A)と(B)の衣装は、どんなことを象徴しているか。モデル図BとCを合わせてみよう。</p> | <p>T:発問する。 P:答える。 T:発問する。 P:答える。 T:説明する。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○ (A)も、(B)もともに中国皇帝から下賜された官服である。 ○ (A)と(B)には、それぞれにおける交易が象徴されており、琉球と蝦夷地は昆布によって結びついていた。 ○ 近世日本列島は、南の琉球と北の蝦夷地における交易によって中国と結びついていた。ここに、日本列島社会の歴史は世界史とつながっている。 |

【3時間目】

| | | | |
|----|--|---|---|
| 導入 | <ul style="list-style-type: none"> ○ モデル図回・回で、近世日本の世界との結びつきを確認してみよう。 ○ 近世日本の外交は、一般にどのように理解されているか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 「鎖国」という言葉から、どんなイメージをもつ持たせようか。 ・ そのイメージは、モデル図回・回と一致せようか。 ● 4つの窓口で通商・交易が行われていたにもかかわらず、なぜ「鎖国」というのだろうか。 | <p>T:指示する。 P:確認する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。 T:発問する。 P:答える。 T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:学習課題を提起する。 P:学習課題を確認する。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○ 長崎のみならず、琉球王国や蝦夷地のアイヌ、さらに朝鮮を通して世界と結びついていた。 ○ 「鎖国」といわれている。 ○ 閉鎖的・孤立的な日本。 ○ 「鎖国」というけれど、通商・交易は4つの窓口で行われており、イメージと一致しない。 |
|----|--|---|---|

| | | | |
|-----------------|--|--|--|
| <p>展開 1</p> | <p>○ 「鎖国」はどのように説明されているだろうか。</p> <p>・ この説明はモデル図B・Cにあてはまるだろうか。</p> <p>・ この説明は、一貫して変わっていないのだろうか。</p> <p>・ 教科書ではどうだろうか。</p> <p>○ なぜ「鎖国」の説明は変化したのだろうか。</p> <p>・ 「鎖国」は歴史の事実だろうか。</p> <p>・ 私たちは歴史で何を学習しているのだろうか。</p> <p>・ 例えば、1192年にあった出来事は何か。</p> <p>・ 「歴史は解釈である」とすると、それを学ぶ意義はあるのだろうか。</p> <p>・ なぜ「鎖国」の説明は変わったのだろうか。</p> | <p>T:資料を提示し、発問。 P:答える。</p> <p>T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:資料を提示し、発問。 P:発問する。</p> <p>T:確認する。</p> <p>T:資料を提示し、発問。 P:答える。 T:確認する。 T:考えさせる。 P:考える。 T:資料を提示し、発問。 P:確認する。</p> <p>T:説明する。 P:確認する</p> <p>T:発問する。 P:答える。 T:説明する。</p> <p>T:説明する。 P:確認する。 T:説明する。 P:確認する。</p> | <p>⑭ ○ 用語集では、「日本人の海外渡航の禁止と外国船来航規制」などの事実を列挙したあと、「通信国・通商国」について4つの窓口の事実をあげて説明し、さらに4つの窓口に関する関連説明が続いている。</p> <p>○ あてはまる。</p> <p>○ 古い用語集では、「朝鮮と琉球からの使節の来日」の事実の説明が抜けており、4つの窓口の事実の説明もなく、従ってその関連説明もない。</p> <p>○ 「中国・オランダ以外の国との外交・通商を禁じる政策」という説明で、閉鎖的・孤立的日本というイメージがうかがえる。</p> <p>○ 教科書でも「鎖国」の説明は変化している。</p> <p>○ 「鎖国」という言葉で説明される内容は変化している。</p> <p>○ 新しい事実の発見があったから・・・。</p> <p>○ 「鎖国」は、19世紀初、長崎通詞の志筑忠雄がケンペルの論文を訳した時、その論文のタイトルを「鎖国」と翻訳したことに始まる。 従って、「鎖国」は歴史上の出来事そのものではない。</p> <p>○ 私たちが学習している「歴史」には、「過去の出来事そのもの」と「それを意味づけしたもの(解釈)」の2つがある。「鎖国」は、意味づけしたものである。</p> <p>○ 鎌倉幕府が開かれた、頼朝が征夷大将軍に就いた。 ○ 「征夷大将軍に就いた」が出来事で、「幕府が開かれた」が意味づけである。</p> <p>○ それぞれの事実に関する実証的な研究の積み上げによって、解釈としての歴史は再審され、客観性は担保される。</p> <p>○ 「鎖国」は解釈であり、薩摩藩による琉球、対馬藩による朝鮮、松前藩によるアイヌ交易の3つの窓口の事実の実証的研究が積み上げによって、「鎖国」の解釈は再審された。</p> |
| <p>展開 2</p> | <p>○ 「鎖国」の古い解釈の再審とは、具体的にどのようなことだろうか。</p> <p>・ もう一度、「鎖国」という言葉が生まれた事情を見てみよう。</p> <p>・ 「鎖国」認識は、その後どうなったのだろうか。</p> <p>・ こうした認識では、「鎖国」はどこの国に対して国を閉じることになるのか。</p> <p>・ こうした認識によると、「鎖国」の説明はどのようなことになるだろうか。</p> <p>・ このことから、「鎖国」の古い解釈について、どういことがいえるだろうか。</p> | <p>T:発問し、考えさせる。 P:考える。</p> <p>T:資料を提示し、発問。 P:答える。</p> <p>T:確認する。</p> <p>T:説明する。 P:確認する。</p> <p>T:説明する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。 T:説明する。</p> <p>T:発問する。 P:答える。</p> <p>T:発問する。 P:答える。</p> | <p>○ ……。</p> <p>○ ロシアやイギリスが日本近海に現れ通商を求めるという日本をとりまく情勢の下で、「開国」による危機を意識した志筑忠雄は、「開国」に対して、それまでの日本の状況を「鎖国」という言葉で表現し、それを肯定した。</p> <p>○ もともと志筑のいう「鎖国」には、西欧に対して国を閉ざすということが含意されている。</p> <p>○ 明治になると、「鎖国」をそれによる得失という視点から捉え、「『鎖国』=近代化の遅れ」という否定的な認識と、「『鎖国』=独自の文化の形成」という肯定的な認識が現れた。</p> <p>○ 以来、閉鎖性・特殊性という「鎖国」認識が常識として定着していった。</p> <p>○ 西欧諸国。</p> <p>○ 近代化=西欧化であり、西欧に対する独自の文化であり、対西欧を意識した認識であるといえる。</p> <p>○ ヨーロッパへの窓口が長崎だけになったという事実だけが取り上げられ、アジアへの3つの窓口の事実は無視されることになる。</p> <p>○ 「鎖国」の古い解釈には、西欧中心史観が認められる。従って、アジアとの結びつきは切り捨てられ、琉球やアイヌの歴史も無視されることになる。</p> |

| | | | |
|----|--|--|---|
| | <p>○ 旧い解釈と認識には、他に問題点はないだろうか。</p> <p>・ 旧い解釈と認識は、どういふことを前提としているだろうか。</p> | <p>T:説明する。</p> <p>T:考えさせる。</p> <p>P:考える。</p> <p>T:発問する。</p> <p>P:答える。</p> <p>T:説明する。</p> | <p>○ 解釈にはそれが依拠する視点がある。「鎖国」の捉え直しは、旧い解釈が立脚する西欧中心主義、脱亜的なアジア観の視点の再審であるといふことができる。</p> <p>○ ……。</p> <p>○ 日本は「近代化に遅れてはいるが、独自の文化を形成している」といふ結果を前提にし、その原因を「鎖国」に求めている。</p> <p>○ 旧い解釈は結果論であり、「日本論」「日本文化論」と関係している。結果論に依拠すれば、「鎖国」の原因や経過の実証的研究は無視されることになる。</p> |
| 終結 | <p>○ 私たちが学ぶ「歴史」についてわかったことを整理してみよう。</p> | <p>T:整理させる。</p> <p>P:整理し、確認する。</p> <p>T:説明する。</p> | <p>○ 「歴史」には、事実としての過去の出来事とその解釈がある。解釈は、事実の実証的研究の積み重ねによって、その客観性が再審される。</p> <p>○ 私たちが学ぶ歴史は、相対的・暫定的な解釈としての真理性と意義を持つ。</p> |

4. 教授資料およびその出典

【1時間目】

- ① 《「南の王」と「北の首長」の衣装》… 大石直正ほか著『日本の歴史14 周縁から見た中世日本』講談社、2001年、巻頭の口絵より
- ② 《中国の冊封体制》… 『世界史詳覧』浜島書店、1997年、p. 69より
- ③ 《明朝への諸国の入貢回数》… 新城俊昭『高等学校 琉球・沖縄史』1997年、p. 62より
- ④ 《進貢馬の数量変遷》… 高良倉吉・田名真之編『図説琉球王国』1993年、p. 27より
- ⑤ 《「万国津梁の鐘」銘文》… 前掲② p. 62より
- ⑥ 《交易船で賑わう那覇港「琉球貿易図屏風」》… 前掲① 巻頭の口絵より
- ⑦ 《琉球王国の「江戸上り」》前掲④ p. 70
- ⑧ 《薩摩藩の隠蔽工作「漂着船への対応」》… 前掲③ p. 89より
- ⑨ 《「イリコ」と「昆布」》… 前掲④ p. 76より

【2時間目】

- ⑨ 《昆布の主な産地》… 日本昆布協会ホームページより (<http://www.kombu.or.jp/>)
- ⑩ 《徳川家康「黒印状」》… 田端宏・桑原真人ほか著『県史1 北海道の歴史』山川出版、2000年、p. 74-75より
- ⑪ 《アイヌの首長たちの藩主謁見「ウイマム」》… 前掲⑩ 巻頭の口絵より
- ⑫ 《アイヌの首長たちの商場役人への挨拶「オムシャ」》… 前掲⑩ 巻頭の口絵より
- ⑬ 《山丹服と蝦夷錦》… 前掲①

【3時間目】

- ⑭ 《用語集の「鎖国」の説明(1)》… 全国歴史教育研究協議会編『日本史用語集』山川出版、1988年、pp. 123-24
- ⑮ 《用語集の「鎖国」の説明(2)》… 全国歴史教育研究協議会編『改訂新版・日本史用語集』山川出版、2000年、pp. 141-43
- ⑯ 《「鎖国」の教科書比較》… 『新編新しい社会6上』東京書籍、1987年、pp. 79-80／『新訂新しい社会6上』東京書籍、2001年、pp. 63-65
- ⑰ 《「鎖国」といふ言葉の由来》… 『日本歴史大事典2』小学館、2000、p. 251「鎖国論」の項目

V. おわりに

本稿では、①「歴史に対する関心と世界史学習への意欲を高める」こと、②『歴史とは何か』について考えさせ、『解釈としての歴史』に気づかせる」こと、の二つをねらいとして、「世界史B」の導入部「世界史の扉」における主題学習の教材開発を試みた。①は指導要領に即したものであり、②は筆者が『「多元主義」の歴史授業』という立場から工夫したものである。

開発した教授書を、世界史の授業開きの一環として、

そのままの形で授業化することは難しいだろう。それは「気づかせ、関心と意欲を高める」ことに主眼をおいた「世界史」の導入部の内容としては、パートIの内容がやや詳し過ぎるからである。「気づかせる」ことをねらいとする事実記述的構成の授業のあり方、事実的な知識の質と量の吟味・精選などさらに検討を加え、改良していかなければならないが、「近世日本列島の歴史と世界史とつながり」についての授業者用の基本的な理解モデルには十分なり得るのではないかと思っている。また、パ

ートIIは、パートIでどのような内容を扱うかによってそれぞれ追究させる内容を工夫をしなければならないが、ぜひ世界史学習の事始めとして「世界史の扉」に組み込みたいものである。次稿では、「世界史B」の終結部の主題学習の教材開発に取り組みたい。

【註】

- 1) 拙稿「高等学校『世界史』の『主題を設定し、追究する』学習(1)―『世界史』主題学習の変遷―」広島大学附属福山中・高等学校研究紀要『中等教育研究』第44巻, 2004
- 2) 「多元主義」の歴史授業については、拙稿『『多元主義』歴史授業の可能性―地域から歴史を考える―』(全国社会科教育学会『社会科教育』第58号, 2003)を参照されたい。
- 3) 池野範男代表, 平成10~12年度科学研究費補助金研究成果報告書『現代民主主義社会の市民を育成する歴史カリキュラムの 開発研究』2001/児玉康弘「中等歴史教育における『解釈批判学習』の意義と課題―社会科教育としての歴史教育の視点から―」全国社会科教育学会『社会科研究』第55号, 2001/寺尾健夫「社会的構成主義に基づく歴史授業の構成原理」日本教科教育学会『日本教科教育学会誌』第24巻1号, 2001
- 4) 前掲2)では、「地域から歴史を考える」という視点から、長崎、沖縄の歴史を素材としたメタ・ヒストリー学習の事例を提示している。
- 5) 〈歴史への真摯さ〉とは、異なる視点からの歴史に対する想像力を認めようという歴史に対する構えである。詳しくは、
- 6) 次の文献を参考にした。
 - 荒野泰典『近世日本と近代アジア』東京大学出版会, 1988
 - 濱下武志『朝貢システムと東アジア』岩波書店, 1997
 - ロナルド・トビ「変貌する『鎖国』概念」(永積洋子編『「鎖国」を見直す』山川出版社, 1999
 - 山本博文『鎖国と海禁の時代』校倉書房, 1995
 - 川勝平太『『脱亜』過程としての日欧の近世』『歴史評論』515号, 1993
- 7) パートIの教材開発に際しては、以下の文献を参考にした。
 - 網野善彦『日本の歴史1―「日本」とは何か―』講談社, 2000
 - 大石直正・高良倉吉ほか『日本の歴史14―周縁から見た中世日本―』講談社, 2001
 - C. グラック・姜尚中ほか『日本の歴史25―日本はどこへ行くのか―』講談社, 2003
 - 岸本美緒『世界の歴史12 明清と李朝の時代』中央公論新社, 1998
 - 高良倉吉『琉球王国』岩波新書, 1993
 - 高良倉吉・田名真之『図説 琉球王国』河出書房新社, 1993
 - 新城俊昭『高等学校 琉球・沖縄史』1997
 - 高良倉吉『アジアの中の琉球王国』吉川弘文館, 1998
 - 原田禹雄『琉球と中国―忘れられた冊封使―』吉川弘文館, 2003
 - 鶴見良行『ナマコの眼』筑摩書房, 1990
 - 菊地勇夫『アイヌ民族と日本人―東アジアの中の蝦夷地―』朝日選書, 1994
 - 佐々木史郎『北方から来た交易民―絹と毛皮とサンタン人―』NHKブックス, 1996
 - 菊地勇夫『エトロフ島―つくられた国境―』吉川弘文館, 1999
 - 田端宏・桑原真人ほか『県史1 北海道の歴史』山川出版, 2000
 - テッサ・モーリス・スズキ『辺境から眺める』みすず書房, 2000
 - 佐々木史郎「松前と山丹交易―大陸との経済文化交流における松前藩の役割について―」北海道松前町平成13年度アイヌ文化講座の講演より
- 8) 土屋武志「世界との関わりを重視した社会科歴史授業の開発―中学校歴史的分野の単元「鎖国」の場合―」(『社会科研究』第41号, 1993) / 佐脇義敏『『鎖国』教材化の試み―現代定着しつつある「鎖国」概念に基づいて―』(全国社会教育学会第51回研究大会自由研究発表資料, 2002) / なお、『歴史地理教育』誌No.568 (1997年10月号)は、「新しい『鎖国』の見方・学び方」を特集し、いくつかの先進的実践を紹介しているが、それらの全貌は非常に見えにくい。
- 9) 主題学習の授業構成としては、事実記述的授業構成と概念探求的授業構成の二つの授業構成があるが、これについては原田智仁「主題学習再考」(社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第12号, 2000) pp. 8~9を参照されたい。

(前稿及び本稿は、広島県私立中高等学校学校教科研究会社会科分科会の平成15年度「夏の研究会」における、筆者の講演「新学習指導要領における主題を設定し追究する学習について」を加筆修正したものである。)